

に近いものはない。印度は何れの時代にも、西方の侵入影響に極めて無防禦になつてゐる。然し此の點は第二次的關係のもので、重要なのは、彫刻家の何人であつたかを知るにある。

直ちに、之が印度人でなかつた事は、何等躊躇する所もなく、斷言し得る。單に塑像を見れば、頭髮の波紋、顔面の橢圓、鼻筋が額と直線をなしてゐる事、眼や口の具合、衣服の襞、何れもギリシア風であり、如何しても、土着の彫刻家が、斯くもギリシア的技工のあらゆる機微を一度に同化し得る所ではなく、更に、假令、目慣れて氣がつかないにしても、一層深い他の理由がある。佛陀の傳承的の型は、何等正統のものでない事を氣付かない程、之に慣れてゐるが、之が一の場合になる。佛陀が頭髮を蓄へてゐる事實は、僧伽の傳承的實際にも、聖典の文面にも反するものである。(詳細に關しては、乙、百三十一頁以下参照)。従つて、——印度人には、剃髮が遁世の根本的特徴となつてゐるから——この主要點については、外國人にあらざれば、何人と雖も、美術にその正統思想を犠牲にして、世尊の頭上に螺髻を作る事を固執し得な